

「森林の多面的機能」  
解説シリーズ

第6回 動物種（哺乳類）保全

関西支所 生物多様性研究グループ 大井 徹

**多様な森は多様な動物を育む**

外来種を除けば日本には100種程度の陸生哺乳類が生息しており、その8割が森林を生活の場としています。しかし、これらの動物の生息地として森林ならばどのようなものでもよいというわけではありません。動物の種類によって好みの森林は異なります。哺乳類の全国分布図と植生図を比べてみると、いくつかの種の分布は特定の植生とうまく重なることが分かります。例えば、ツキノワグマはブナ・ミズナラ林の分布と、イノシシはシイ・カシ林あるいはその代償植生の分布と重なります。また、サルは広葉樹林の分布と関係しています。しかし、これはサルにとって針葉樹林が全く価値のないことを意味しているわけではありません。広葉樹林の中に適度に散在するスギやヒバの林は、サルなど冬も活動する哺乳類によって厳しい風雪を凌ぐためによく利用されます。

哺乳類の森林に対する好みは、森林の発達段階によっても異なります。シカはどちらかといえば攪乱直後の下生えの豊かな若齢林分を好み、サルやクマには若葉と果実を十分生産してくれる広葉樹の壮齢林も必要です。枯損木、倒木、樹洞のある生立木が必要な哺乳類もいます。枯損木や倒木はさまざまな無脊椎動物が発生するのでいい餌場になるとともに、小・中型哺乳類のいい隠れ場所になります。生立木にできた小さな洞はムササビ、モモンガ、一部のコウモリ類などの営巣場所として不可欠です。このような樹木は老齢林に多いと考えられています。つまり、樹種構成、発達・遷移段階など森林生息地の多様性が日本の哺乳類相の多様性を支えているといえます。

**森の若返りにも一役**

野生の哺乳類は一方的に森林を利用するばかりではありません。彼らは森林生態系の維持にとって欠かせない存在でもあります。森林の更新にとって種子が母樹から遠く運ばれることが重要ですが、哺乳類はその運び屋として役立っています。植物の種子には果肉と一緒に動物に飲み込まれ、排泄されることによって運搬されるもの、動物によって貯蔵のため運搬されるもの、体毛に付着して運搬されるものなどがあります。さらに、野生哺乳類は森林の物質循環にも役立っていると考えられています。最近、カナダでの研究によって、森と海が野生生物によって意外な形でつながっていることが明らかになりました。クマなどの哺乳類が海から川へ遡上するサケなどの魚類を捕食し、その食べ残しや糞によって、かなりの量の窒素が森林に還元されていることが分かってきたのです。

**切っても切れない森と動物**

このように野生哺乳類は森林と密接な関係にあるので、森林の変化は彼らにさまざまな影響を与えます。例えば、山の果実が凶作の年にはサルやクマなどによる農業被害が増加することが経験的に知られています。また、森林生息地の分断化は野生動物の自由な往来を妨げることになり、繁殖などに大きな影響を与えます。私達の研究から東北や近畿のある地域では大きな河川がクマの移動を妨げ、その両岸で遺伝的分化が生じていることが分かりました。身体が大きく、移動能力が高いと考えられるクマですらこのような状態なので、その他の野生哺乳類についても森林開発や交通路網による生息地分断化の影響が心配されます。

野生哺乳類の保全、農林業被害の軽減は森林の持つ重要な機能の一部ですが、その機能発揮のための森林管理法の研究はほとんどなされていません。野生哺乳類と森林のかかわりについての実態をさらに明らかにしつつ、この方面の研究を積極的に進める必要があります。



写真 ウワミズザクラの新葉をむさぼり食べるサル（青森県白神山地）